

尿膜管遺残について

静内診療所 野坂拓史

平成25年3月 酪農学園大学 卒業

平成30年1月 日高軽種馬農業協同組合入社
現在に至る

昨年1月から本組合静内診療所で働いている野坂拓史（のさか たくふみ）です、よろしくお願ひします。繁殖シーズンも終盤に近付き、お産が終わっている牧場も多いと思いますが、今回は出生直後から2週齢ほどで見られる尿膜管遺残について書こうと思います。

・尿膜管遺残とは

出生後の仔馬で臍からおしっこが漏れているのを見たことがあるかと思いますが、仔馬はお腹の中にいるときは、膀胱から臍につながる尿膜管を通しておしっこを排泄しています。そして生まれた後、正常では尿道からおしっこを出し、尿膜管が使われなくなることで、閉鎖・退行します。しかし、尿道からの排泄が不十分であったり臍がしっかり乾かず濡れていたりすると、尿膜管が閉じず、いつまでもおしっこが漏れてしまいます。これを尿膜管遺残と言います。胎便停滞や便秘による腹圧増加や力みはこれを増長する一因となります。また、一度閉じても、臍帯炎等により1～2週間ほどして再度尿が漏れ出すこともあります。

・尿膜管遺残の問題

尿膜管を通しておしっこが漏れていると、常に臍周囲が濡れている状態になり、細菌繁殖の温床となり臍帯炎のリスクが高まります。また、尿膜管内で細菌が繁殖し膿瘍を作ること、腹腔内膿瘍や膀胱炎となることもあります。

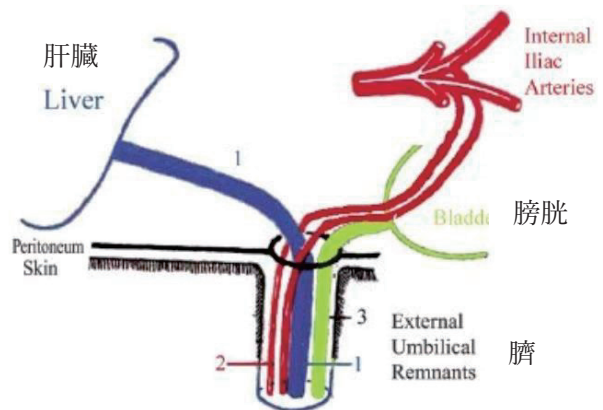
・対処の仕方

まず、正常におしっこが来ているか確認します。正常に出来ていれば、尿膜管は徐々に自然と閉じます。

臍が乾くまでは感染症を予防するために、臍の消毒を続けて下さい。消毒期間が延びるため、ヨードチンキなど刺激の強いものは皮膚荒れの原因となるので、刺激の弱いクロルヘキシジン（ヒビテンなど）をお勧めしています。逆に臍を縛る処置は既にある感染を籠らせたり、尿膜管内に尿を溜めるなどリスクがあるためしないほうが良いでしょう。

また、臍帯炎にかかる可能性があるため、体温はこまめにチェックして下さい。

正常におしっこが出ない、臍からかなりの量が出る、いつまで経っても止まらない、などの場合は導尿により排尿ルートを確認する必要があります。そのため、獣医師に相談してください。また、熱がある、元気がないなど臍帯炎が疑われる場合もすぐに獣医師を呼んでください。



臍からは頭側に静脈(青)が1本、尾側に動脈(赤)が2本、動脈の間を尿膜管(黄)が通っている